

学校への学生派遣を支援する オンラインソフトの利用と課題

弘前大学教育学部 附属教育実践総合センター
小山 智史, 羽賀 敏雄, 吉崎 聡子, 伊藤 成治

1 はじめに

教員養成においては、従来から行われている教育実習とは別に、学生が学校に出向いて活動する機会が増えている。その契機となったのは文部科学省のフレンドシップ事業と放課後学習チューター事業である。表1は、本学の学生が学校で活動する主な事業における数を示したものである。最近は数人規模の活動が数多く行われている。

このような事業を効果的かつ継続的に展開するには、学生のシーズと派遣先となる学校のニーズの擦りあわせを行い、双方にメリットをもたらすことが重要である。

学生は平日の授業の合間や休日に時間の都合をつけて希望する体験や支援を行うため、可能な時間帯は限られる。また、学校は学校行事や学習内容や生徒の状況に応じて必要とする支援の内容や時間帯が決まる。このような両者の都合を調整するスタッフの労力は、派遣の機会が増えるにつれ無視できないものとなってきた。

ここでは、このような斡旋業務を支援するために開発した Web ベースのオンラインソフト (以下「斡旋ソフト」という) について紹介し、本年度の利用状況を報告する。

なお、これに先立ち、平成 16 年度に斡旋ソフトの試験運用を行い、動作の確認を行っている [1]。

表 1: 弘前大学における学校への派遣学生数

	フレンドシップ活動 (註 2)			放課後チューター		学校生活体験実習 (註 3)		
	延べ学生数	回数	校数	学生数	校数	延べ学生数	回数	校数
平成 12 年度	127	3	3	-	-	-	-	-
平成 13 年度	59	4	1	-	-	-	-	-
平成 14 年度	160	15	8	-	-	-	-	-
平成 15 年度	144	17	9	59	6	-	-	-
平成 16 年度	131	17	10	66	6	-	-	-
平成 17 年度 (註 1)		5	4	8	3	47	9	2

註 1) 平成 17 年度は 9 月 22 日現在

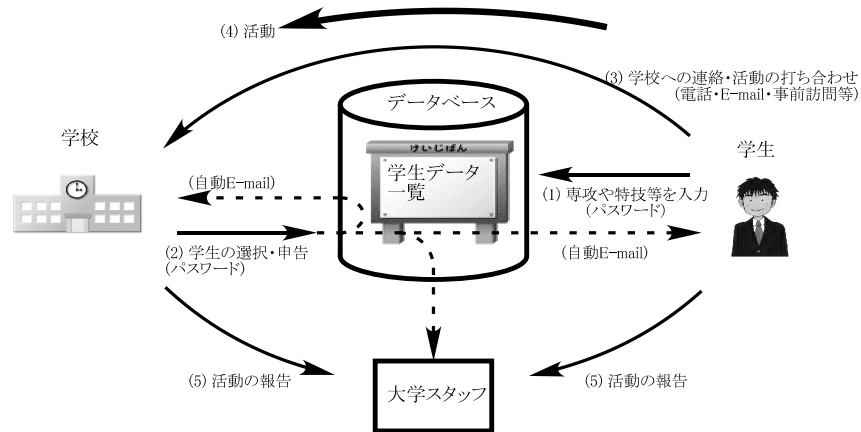
註 2) フレンドシップ活動は学校での活動分のみを抽出した。

註 3) 学校生活体験実習は附属小中学校分のみを抽出した。

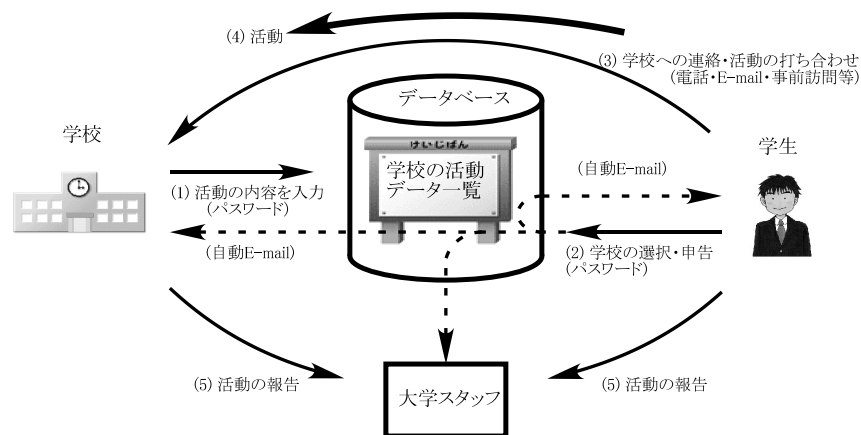
2 斡旋ソフトの概要

斡旋には、「学生が活動希望データを登録し、学校側がその一覧を見て特定の学生に派遣を希望する場合」と、「学校が派遣を希望する活動データを入力し、学生側がその一覧を見て学校への派遣を希望する場合」の 2 つがあり (図 1)、開発した斡旋ソフトはその両方の使い方ができるようになっている。以下、それぞれの場合について、斡旋ソフトの観点で説明する。

いずれの場合も、はじめにシステム管理者 (大学スタッフ) は派遣対象の学校の基礎データ (学校名・担当



(a) 学生が活動希望データを登録し学校が学生にアプローチする場合



(b) 学校が活動データを登録し学生が学校にアプローチする場合

図 1: 斡旋の流れ

者名・連絡先) を登録し、学生には各自の基礎データ (学年・専攻・連絡先) を登録させる。学校は複数登録でき、同一校に複数の担当者がある場合はそれらを個別に登録してもよい。

2.1 学生が登録した活動希望データを見て学校が学生にアプローチ (図 1(a))

- (1) 学生は、メニュー画面 (図 2(a)) でユーザ ID とパスワードを入力した後、[学生データ入力] ボタンを押し、氏名、学年、専攻、希望日、得意な事などを入力する (図 1(a)(1), 図 2(c))。
- (2) 学校は、メニュー画面 (図 2(a)) で [学生データ一覧] ボタンを押すと、学生の活動希望データの一覧が表示される (図 2(e))。学生の派遣を希望する場合は、学校名を選択しパスワードを入力して [学生データ一覧] ボタンを押すと、「派遣の依頼」の欄が現れるので、希望する学生の [依頼する] ボタンを押す。確認画面が現れた後、学生にその旨連絡される。連絡は自動メールで行われ、当事者である学校と学生の他、大学スタッフにも送られる (図 1(a)(2))。学生の名前と連絡先が表示されるので、印刷またはメモをする。
- (3) 学生は、学校に電話連絡をして、詳細の打ち合わせをする (図 1(a)(3))。学生は、派遣が決定したり、活動可能な時期に変更が生じた場合は速やかにデータを更新する。

- (4) 学校で学生の活動が行われる (図 1(a)(4))。
- (5) 学生と学校の双方が、活動終了後に 1 日単位で簡単な活動レポートを書き、大学に提出する (図 1(a)(5))。

2.2 学校が登録した活動データの一覧を見て学生が学校にアプローチ (図 1(b))

- (1) 学校は、メニュー画面 (図 2(a)) で学校を選択しパスワードを入力した後、[学校データ入力] ボタンを押し、学生の派遣を希望する活動日や活動内容などを入力する (図 1(b)(1), 図 2(d))。
- (2) 学生は、メニュー画面 (図 (a)) で学校を選択し [学校データ一覧] ボタンを押すと、学生の派遣を希望する学校の活動データの一覧が表示される (図 2(f))。学校に派遣の申込みをする場合は、ユーザ ID とパスワードを入力して [学校データ閲覧] ボタンを押すと、「派遣の申込み」の欄が現れるので、希望する活動の [申込み] ボタンを押す。確認画面が現れた後、学校にその旨連絡される。連絡は自動メールで行われ、当事者である学校と学生の他、大学スタッフにも送られる (図 1(b)(2))。学校の連絡先が表示されるので、印刷またはメモをする。なお、このシステムを利用する学生は、あらかじめ基礎データ (学年・専攻・連絡先) を入力しておく必要がある。
- (3) 学生は、学校に電話連絡をして、詳細の打ち合わせをする (図 1(b)(3))。学校は、必要学生数が確保されたら当該活動の登録データを削除する。
- (4) 学校で学生の活動が行われる (図 1(b)(4))。
- (5) 学生と学校の双方が、活動終了後に 1 日単位で簡単な活動レポートを書き、大学に提出する (図 1(b)(5))。

2.3 システム管理者 (大学スタッフ) の役割

メニューの [学校登録] をクリックすると、登録されている学校の一覧が表示される。ここで管理用パスワードを入力すると、学校データを [登録] や [削除] することができる (図 2(b))。新規に学校データを登録した場合は、発行したパスワードを学校の担当者に伝える。管理者は学校や学生が入力したデータを [削除] することもできる。

通常、学校と学生の連絡は直接行われるので、個別に管理者が介在する必要はない。しかし、管理者が状況を把握することは必要であるため、学校や学生が [派遣の依頼]/[派遣の申込み] ボタンを押した時には、相手に E-mail が送信されると同時に、管理者にも E-mail が送信されるようになっている (図 1(a)(2), (b)(2))。派遣の手続きがなされたにもかかわらず、活動レポートが提出されていない場合は、学生に確認をするなど適切に対処する必要がある。

活動日毎に学校と学生の双方から提出される活動レポートを見て、互いの期待にズレが無かったか、不都合な点が無かったかなどのチェックを行うとともに、今後の展開の参考にしている。

3 幹旋ソフトの利用と学生の活動

3.1 本年度の幹旋ソフトの利用

平成 17 年度は、学校生活体験実習 (2 年次) の授業の一部として附属中学校に派遣する学生について本ソフトを利用している [2]。この実習は、教育実習前の 2 年次の段階で附属学校での 8 時間の参加・支援活動を課している。9 月までの活動状況を表 2 に示す。

表 2: 斡旋ソフトを用いた附属中学校への学生派遣 (平成 17 年度, 9 月 22 日現在)

活動日	活動時間 (時間)	活動内容	参加学生数 (人)
5 月 31 日	4	資料室整理	6
6 月 30 日	2	理科実験準備	2
7 月 1 日	2	理科実験準備	2
7 月 12 日	2	保健資料整理	6
7 月 14 日	2	理科実験準備	2
7 月 19 日	2	図書室整理	8
9 月 10 日	2	陸上部練習補助	1

好評であった。

一方、学生側からは、「初めて経験する事が多く大変だったが、充実した活動であった」「教師の仕事が授業だけでなく、準備・後片づけ・事務作業等多岐にわたることを実感した」など、こちらも概ね好評であった。

また、「活動の充実度」「今後の継続希望」のチェック欄は、学校側学生側いずれも高い評価であった。

比較的大きな学校行事に多くの学生が参加する従来のパターンと比べ、表 2 にあるように学校で日常行われている小さな活動を支援・体験する機会が数多く設けられているのが特徴である。斡旋ソフトは運用方法に課題を残したが、対象とした小活動自体は学校学生双方から好意的に受け止められているようである。

4 まとめ

学校が支援を希望する学校行事や学習補助と、学生の希望や都合を効果的に斡旋するためのソフトを開発し、利用した。

現在までのところ、学生の活動は、生徒と直接触れ合うものよりも、資料や実験器具の整理などの作業を手伝ういわば裏方の小活動が多かった。このような体験も教師の仕事の別の側面から見ることとなり、学生には新鮮な体験となったようである。

多数の小活動を斡旋するという繁雑な作業を補うことが斡旋ソフト開発の目的であったが、その運用には課題が残った。今後も運用の工夫を行いながら有効性の検証を行っていきたいと考えている。

なお、現在学生のユーザ認証は簡易な方法で行っているが、今後認証サーバ (Radius) を使い、大学の教育用システムで用いられているパスワード管理システムとの一元化を図る予定である。

参考文献

- [1] 羽賀敏雄他: “地域の教育を支援する恒常的な学生派遣の可能性と課題”, 教員養成学研究, Vol.1, pp.79-85, 2005.
- [2] 附中サポーター, <http://siva.cc.hirosaki-u.ac.jp/center/assen2/>